

中央アジアのキルギスとウズベキスタンを訪ねて(2)

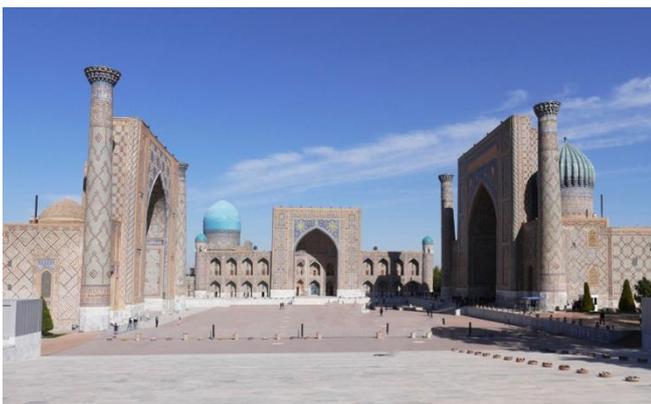
為我井輝忠

10月18日タムガ村からビシュケクへ戻って、さらにここにあと数日滞在して、次の目的地であるウズベキスタンのタシケントとサマルカンドへ行く予定であった。

ビシュケクには「オペラバレエ劇場」という劇場があり、ここも日本人抑留者が建設に携わったと言われているが、真偽のほどは分からない。と言うのは、抑留者たちが建設に携わったと言われていながら、正式な記録がないために不明な状態であった。70年近い年月が様々な記録を消し去っているようである。

次のタシケントへ移動する前に、かつて国土館大学に留学していた Adilet Koolanbekov (アディレット・クーランベコフ) 君に会った。もう5年前になるが、鶴川にある21世紀学部留学していて、何度か他の留学生と共に会う機会があったので、今回連絡を取ると、時間を取ってくれて会うことが出来た。ビシュケク市内を案内してくれただけでなく、夕食を共にすることが出来た。

アディレット君は、現在ビシュケクの JICA 事務所 で農業を専門に働いているそうである。日本にいた時もそうであるが、日本語が大変上手なのには感心するばかりである。日本で会ったキルギス人は皆、日本語のみならず他の言語も上手で、国民性として語学の才に恵まれているのかもしれない。今回の旅行のガイドをお願いしたエレメック氏も日本人と全く変わらず、話している声だけを聞いていると、日本人と間違えてしまうほどである。現地で会った日本人たちも彼のことを日本人だと勘違いしたほど



サマルカンドのシンボルとも言うべきレジスタン広場



ナボイ・オペラ・バレエ劇場

である。また、日本語はもとより母国語であるキルギス語そしてロシア語、英語も堪能である。日本には2回短期で研修に来たことがあり、今後2020年の東京オリンピックには柔道選手の通訳として来日するそうである。東京での再会が楽しみだ。

ビシュケクで感じたことのひとつを最後に加えたい。それは中国の存在の大きさである。キルギスは中国と国境を接しているため、両者の関係は当然密なものであるが、何かその関係は不気味なものを感じる。例えば、中国文化の進出が著しい。街を歩いているだけでも、中国文化センター、中国語学院の類があちこちで目につく。一方、日本関係の施設と言えば、日本文化センターは1か所だけで、日本語を教えるのは大学が数か所に過ぎない。ここではよく中国人と間違えられる。それほど中国人は多いということなのだろう。

キルギスには計10日間いたことになる。次に、隣国ウズベキスタンのタシケントへ飛行機で移動した。所要時間は1時間強で、あっという間であった。迎えの車でホテルへ移動した。ここは1泊のみで、帰路再度3泊する予定であった。翌朝、サマルカンドへ列車で移動した。超特急「アフラジャア号」という列車に乗ったが、日本の新幹線並みの設備で、ただスピードはそれほどではない。2時間半位でサマルカンドに到着した。この列車の予約は早めに旅行者に頼んであったが、最低1か月前に予約をする必要があるようで、外国人旅行者のみならず地元の人々にも人気がある列車である。

サマルカンドはもうずいぶん前から来てみたいと思っていた。ここはかつてのシルクロードの要衝の地で、「青の都」と称えられている。長いこと、「サマルカンド」という言葉の響きに魅了されてきた。歴史書によれば、紀元前4世紀、アレクサンドロス大王の遠征軍がこの都にやって来た時、「話聞いていた通りに美しい。いやそれ以上に美しい」と言わしめたほど、繁栄を極めていた。しかし、1220年のモンゴル軍の攻撃で、街の大半が破壊され、壊滅的な被害を受け、無人の巷と化した。そのサマルカンドを蘇えらせたのがティムールである。「チンギス・ハーンは破壊し、ティムールは建設した」と言われるように、彼は帝国各地から連れ帰った職人や建築家たちを使い、サマルカンドをイスラム世界の名だたる都市に復興させた。彼が手掛けた壮大な建築群は、それから600年を経た現在も圧倒的な迫力で旅人を魅了している。

サマルカンドで**は**まず訪れたのはレジスタン広場である。ここはサマルカンドのシンボルとも言うべき広場で、3つのメドレセ（神学校）が広場を取り囲み、イスラム調の建物が生み出す見事な調和を見ることが出来る。ウルグベグ・メドレセ、シェルドル・メドレセ、ティラカリ・メドレセの3つの神学校は今では観光施設となっているが、かつての栄華を偲ぶことが出来る。

サマルカンドには5泊した。この間、様々なモスク、ロシア正教会、シナゴーク（ユダヤ教会）、博物館等を訪ねたが、ツアーではなかったので、気ままに、自由に滞在することが出来た。

その後もう一度タシケントに戻り、最後にこの地にある日本との関わりのある場所を訪ねた。今回訪ねてみたいと思っていた場所は「ナボイ・オペラ・バレエ劇場」である。1947年に完成した劇場はソ連のシベリアから連れてこられた日本人抑留者が、2年にわたり強制労働で建設に携わった場所である。1966年4月に発生した大地震の際に、この地の多くの建物が崩壊したにもかかわらず、この建物は無事で何ともなかつたそうだ。「日本人が建てた建物は、地震の時にもびくともしなかつた」という地元の老人の話を聞いた。

ここでは幸いにもオペラの公演を見ることが出来た。たまたま訪れた際にその晩に何かあるようだったので、窓口で尋ねると、オペラがあると言うので、チケットを購入した。オペラの公演も素晴らしかつ



日本人抑留者墓地

たが、建物の内部をじかに見、日本人抑留者の労苦の跡を確かめることが出来た。1500人程収容でき、内装が素晴らしかった。

もう一つ日本人抑留者に関するもので次に訪ねたのは「日本人墓地」であった。この地で亡くなった79名の日本人が葬られた墓地はモスLEM人の共同墓地の片隅にあり、なかなか分からなかつた。しかし、ここまで頼んだタクシーのドライバーが何度も地元の人に尋ねながら、ようやく連れて行ってくれた。公園風に作られた墓地には桜の木が何本も植えられ、ウズベキスタン各地で亡くなられた方々の墓石が皆日本の方に向けて作られていた。その表面には日本語で名前と出身県が刻まれていた。中央には記念碑もあり、たくさんの千羽鶴がたむけられてあつた。ここで墓守とお会いした。この方は父親の代から無償でこの墓の管理をされているそうだ。墓地は落ち葉が見当たらないほどきれいに清掃されていて、その働きには感心させられた。安倍首相がここを訪問した時にお会いし、その労苦を労ってくれたと話していた。

帰路、墓地の近くに「抑留者資料館」があり、ここも見学した。映画監督のスルタノフ・ジャリル氏が集めた当時の抑留されていた日本人に関する資料を数多く集めて、公開したものである。ジャリル氏が直接説明してくれたが、ロシア語とウズベク語だけだったので、よく理解出来なかつた。ただ、日本語の資料や写真などもあり、当時の様子が分かつた。

今回の旅行ではあまり観光地を回るようなことはしなかつたが、その代わりキルギスとウズベキスタン両国で日本人抑留者の足跡を辿ることが出来た。このまま気づかれることなく、歴史のかなたに埋もれてしまうかもしれない事実^に教えられることがたくさんあつた。